

382.11

Y762a

アイヌ人とその史前

昭和6年3月

米村喜男衛

国立国会図書館



0053652000

0053652-000

382.11-Y762a

アイヌ人とその史前

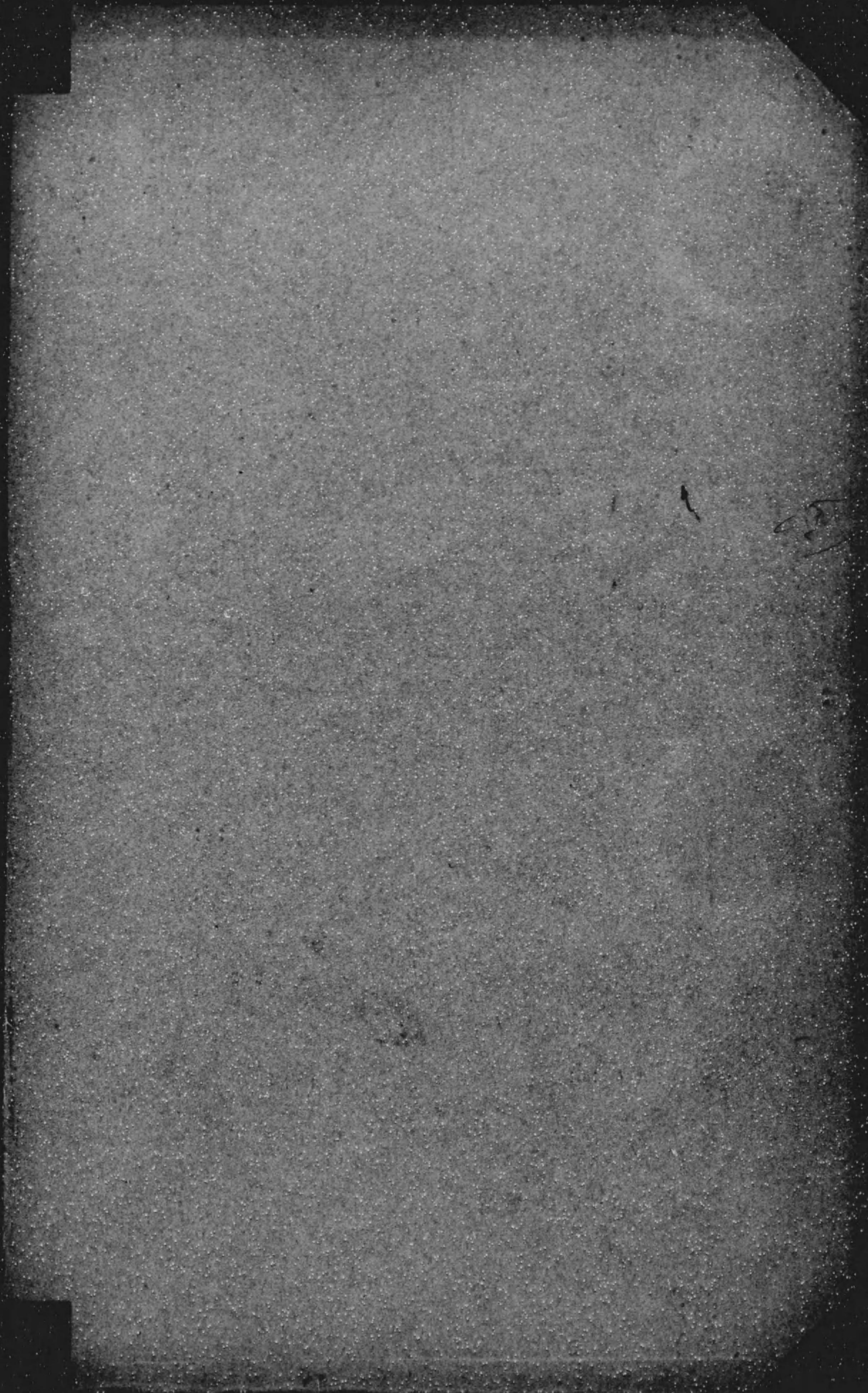
米村喜男衛・著

北見郷土研究会

1931

AIA

1



382.11

Y762a

前史の其人ヌイア

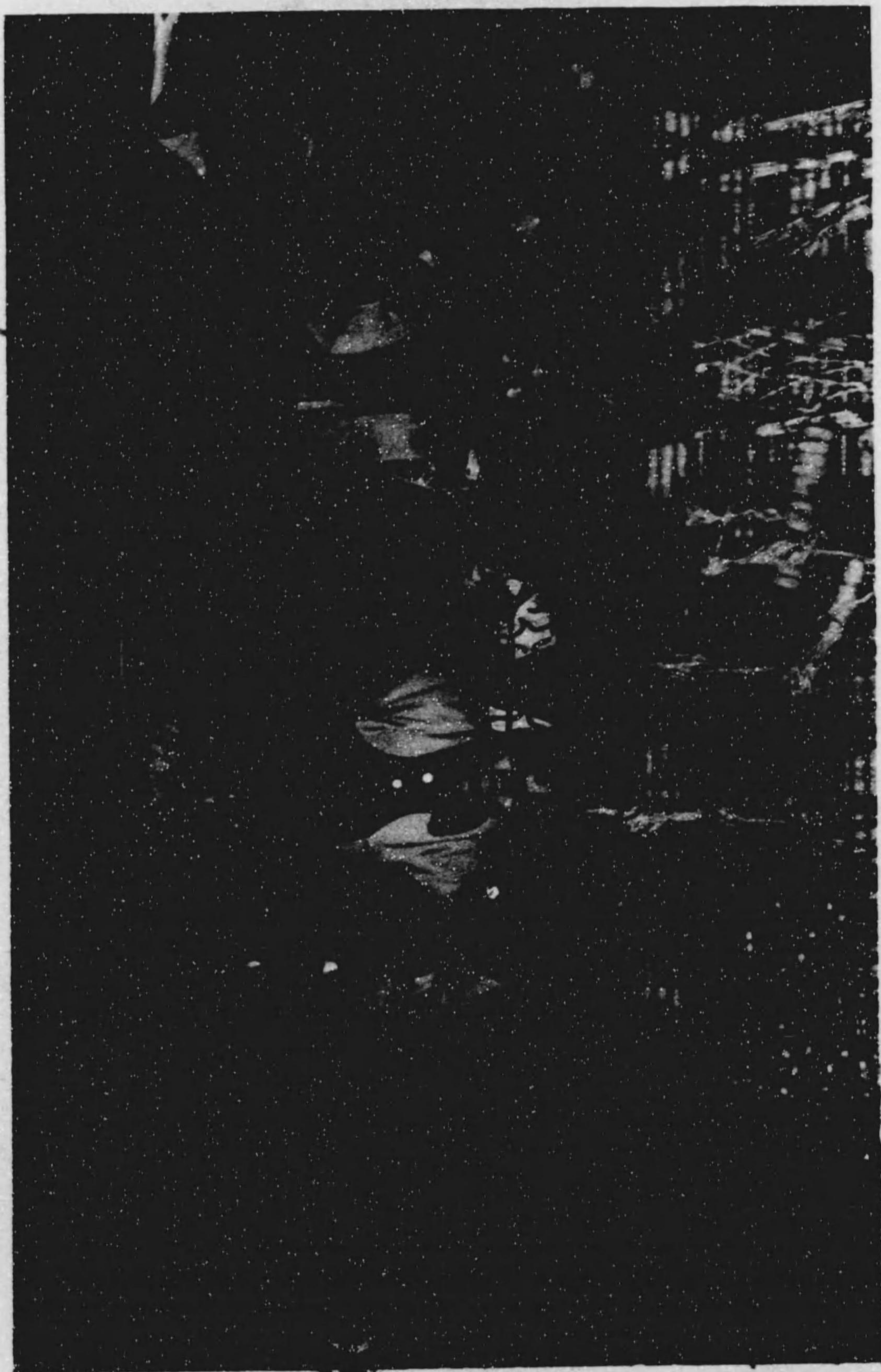
編特輯五第究研土郷



著衛男喜村米

行發會究研土郷見北

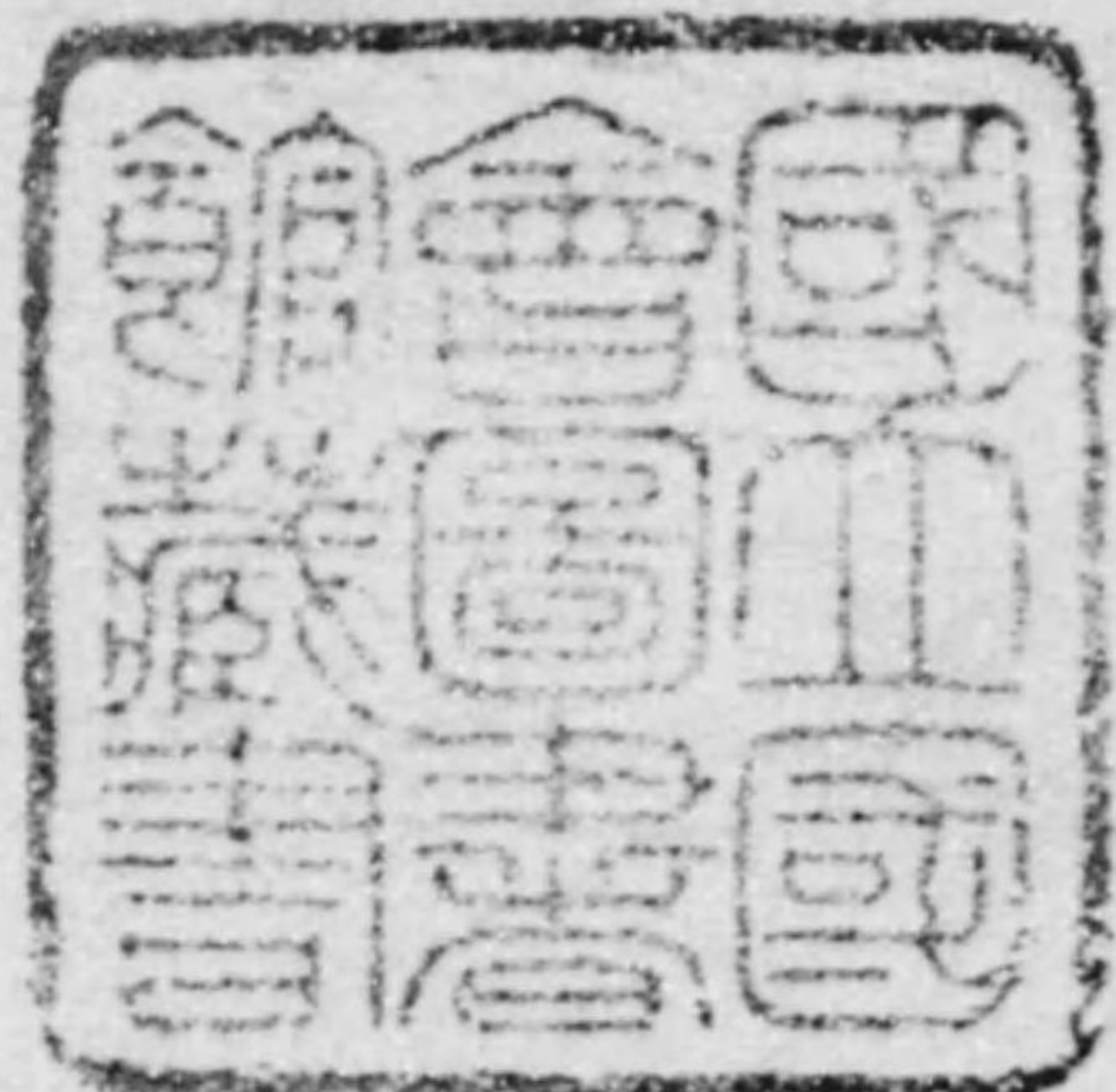
月三年六和昭



に(チノイモカ)はで高日)(神火)チノベアつ先は長家き招を同一へ整を食酒に内屋
。る祈を事んら終くな恙の祭きべふ行け捧を酒神仰
。すなご切大も最てじご神火るな母の々神(母)チノ(火)ベア。言附

382.11

Y762a



219342



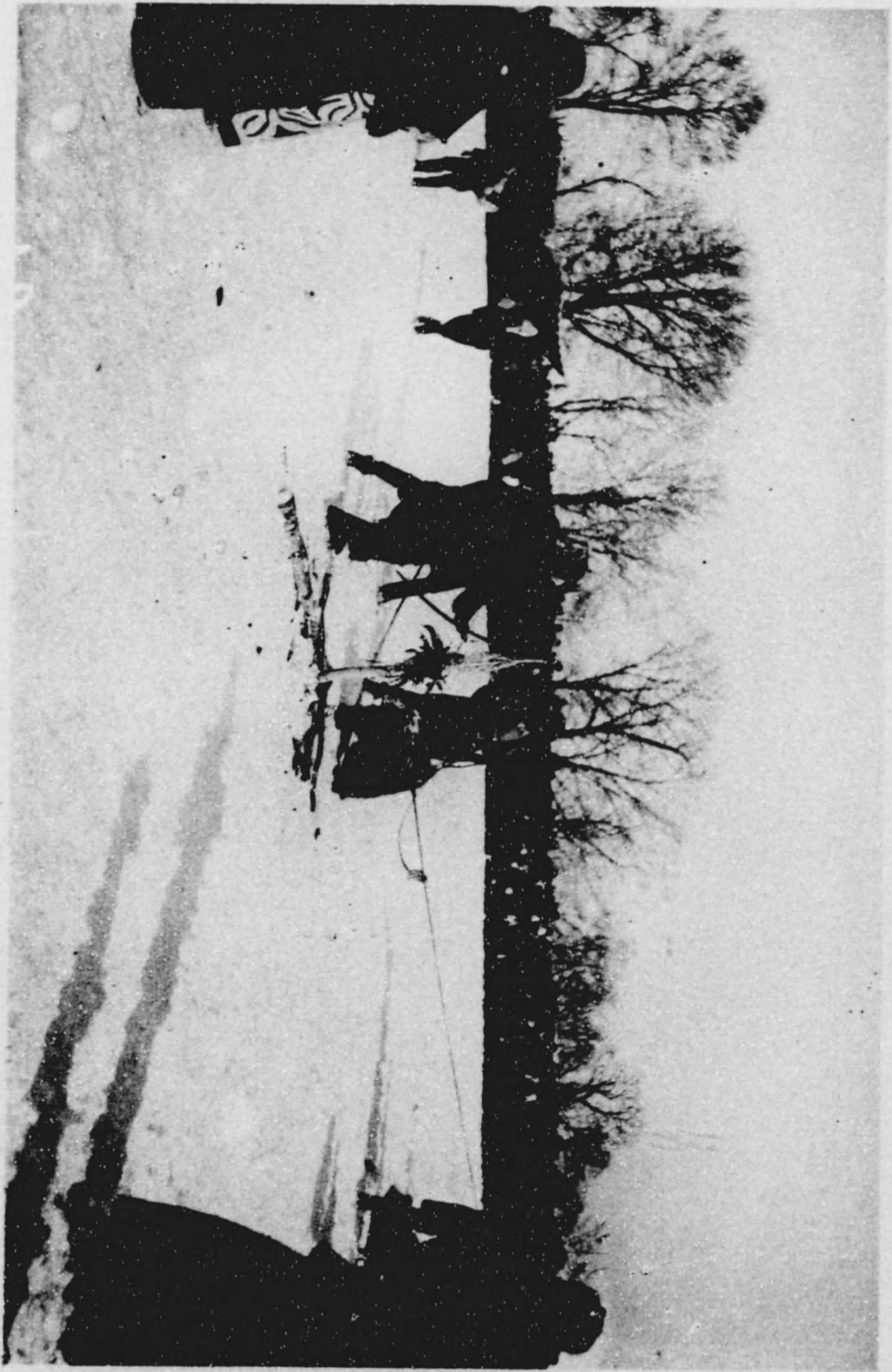
父の前おるな國の神)は(老長)シガイリ至に前の(樞熊)セチイムかるな外屋同一
てり踊きまりをセチ同一女男り祈さ(よれら送にかずし心。るやてし歸へ許の母
。すば喜なしへ工



他の其。子菜。酒てけ付な(人番)キンプ夜前はに熊きべる送
二たれま選。るすをしなてもに限無てへ與をのもるな々種
捧な(盃酒)キトるたせのな(らべ髪付飾)イユシバクイは人
。るいてれさ返線が事ふ養はてり祈げ



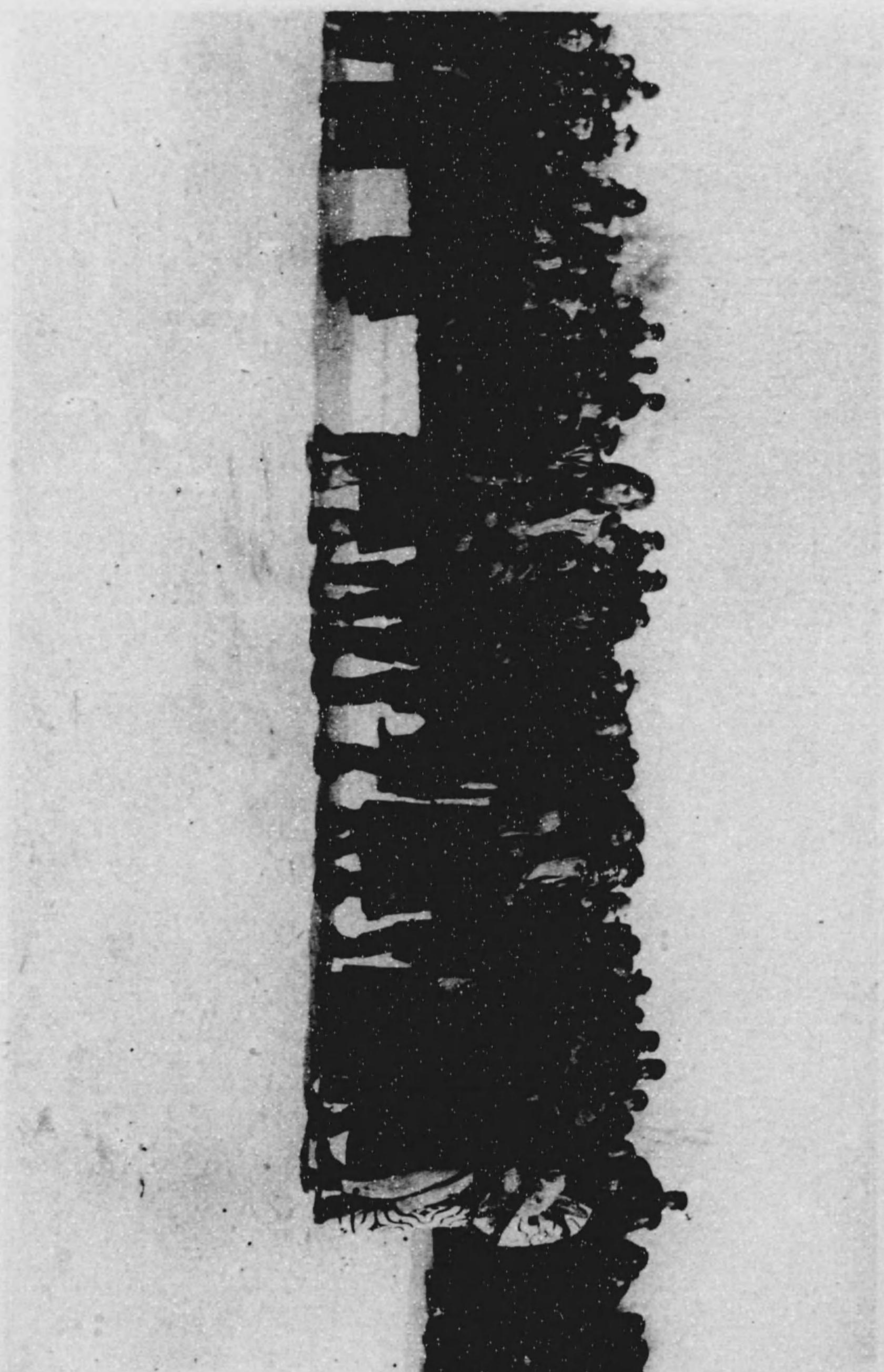
アオシるな方面の(柳帯)ンササヌるな央中の場祭けつな細にレベユてに中の檻熊
ミ様け付を飾てき付飛は年昔ヌイアるな敢勇に熊う狂れ荒けつり縛に(木ぶ結)ニ
るす



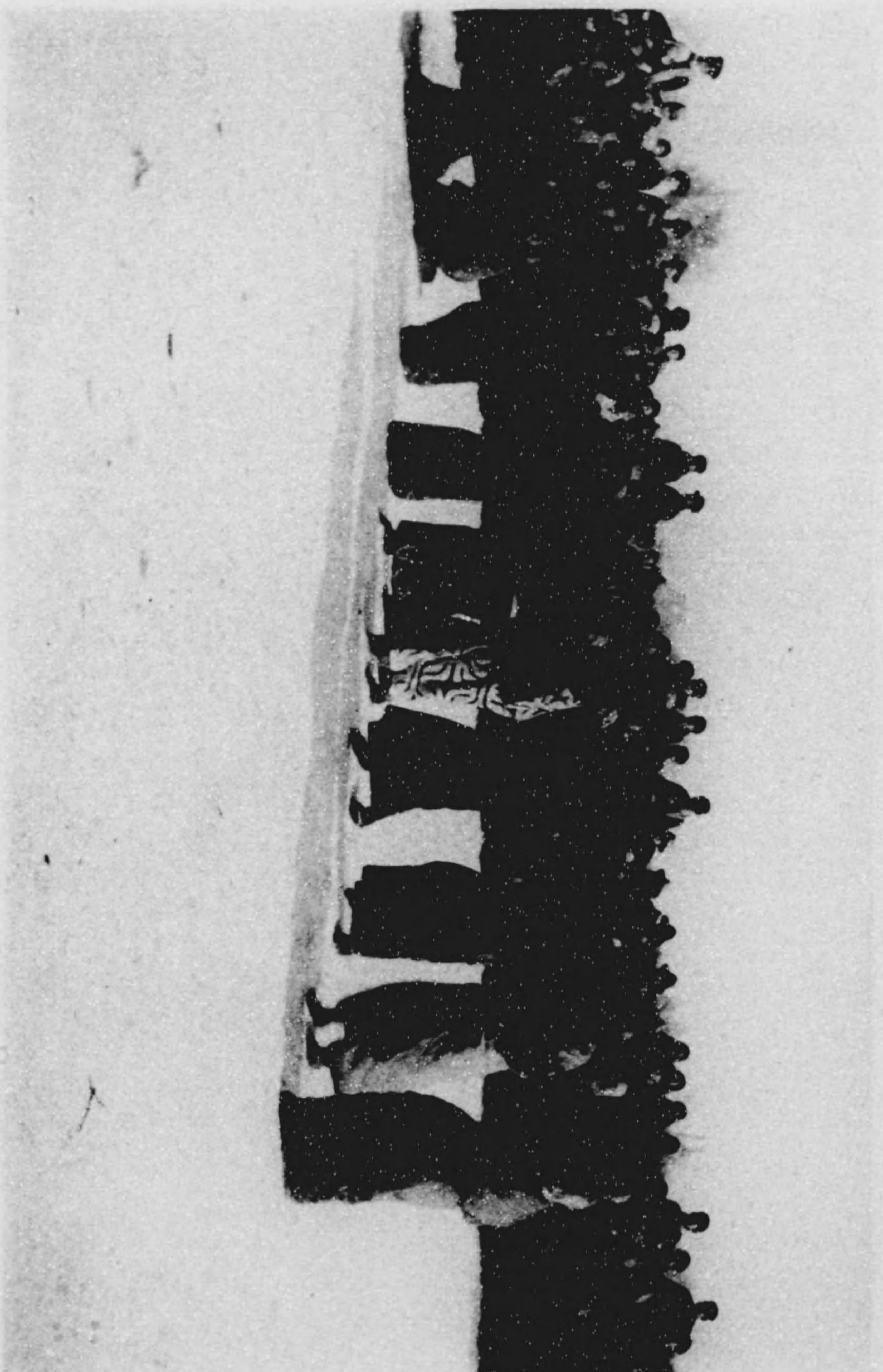
(老長大)シカイネンオけ付り飾へに等(衣の掛刺)ケバンホ(飾耳)ベソルサキはに熊
るけか射を(箭花)エアレベエは子男の若老りよれそはれ射を矢一が



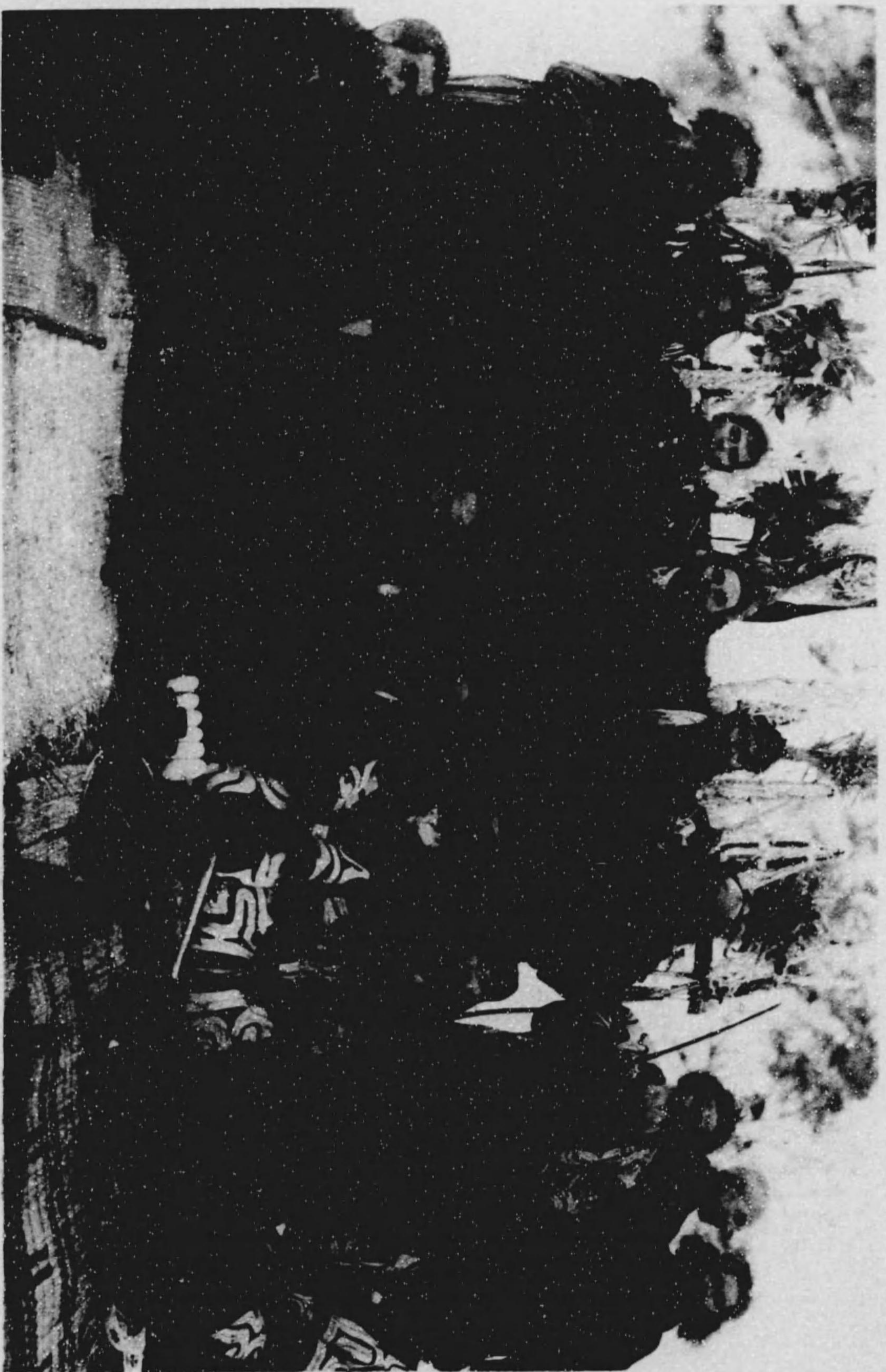
テ殺校にて棒長の本二るへ稱さ(棒殺校)ニバンニクオに後最は熊たれら射を箭花
。下基、酒さ(物賣)ロゴエのく多げ棒な(幣)ウナイリ飾にシササヌのげ設は体死
。りあまつり新てへ併を等賣果



でのな切大も最で中の舞るれはな行かて舞るへ讃を神りリカヲ舞に一第はに前神
嚴莊い舞とつけ助相てへいかな腰の添付が者若に人一人一てと背を刀がみの老長
るあで



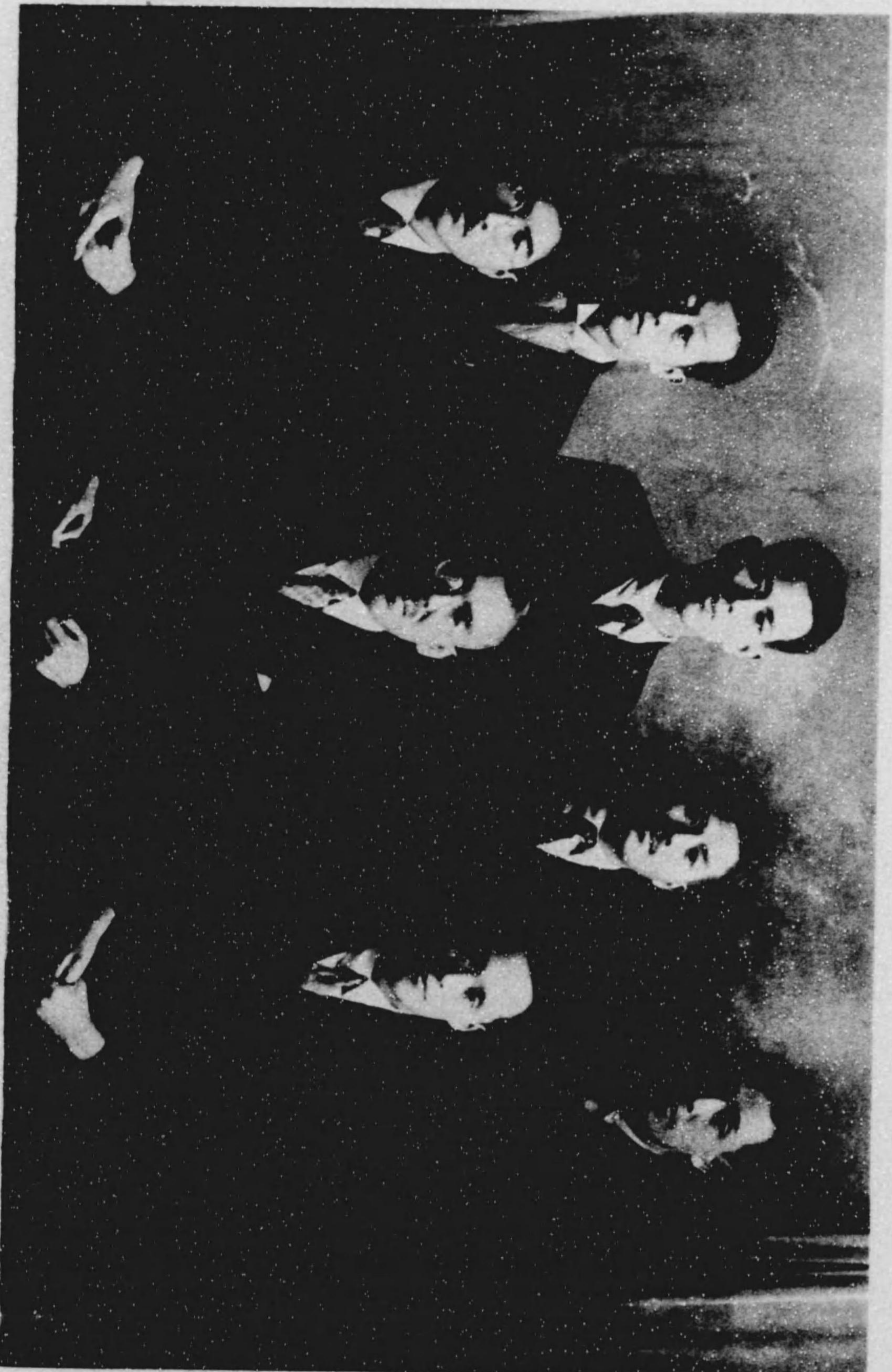
イムカふ行き巻り取を照應はに中の(踊)ホホオがるけ横踊はもど(女)コノメ中祭
ヤシイやはれ之がるあ々種等(ふ喜に共と神)イセムリ(す喜を神)ハバカリサウホ
るあで踊るたじ化進も最るへ稱さマ



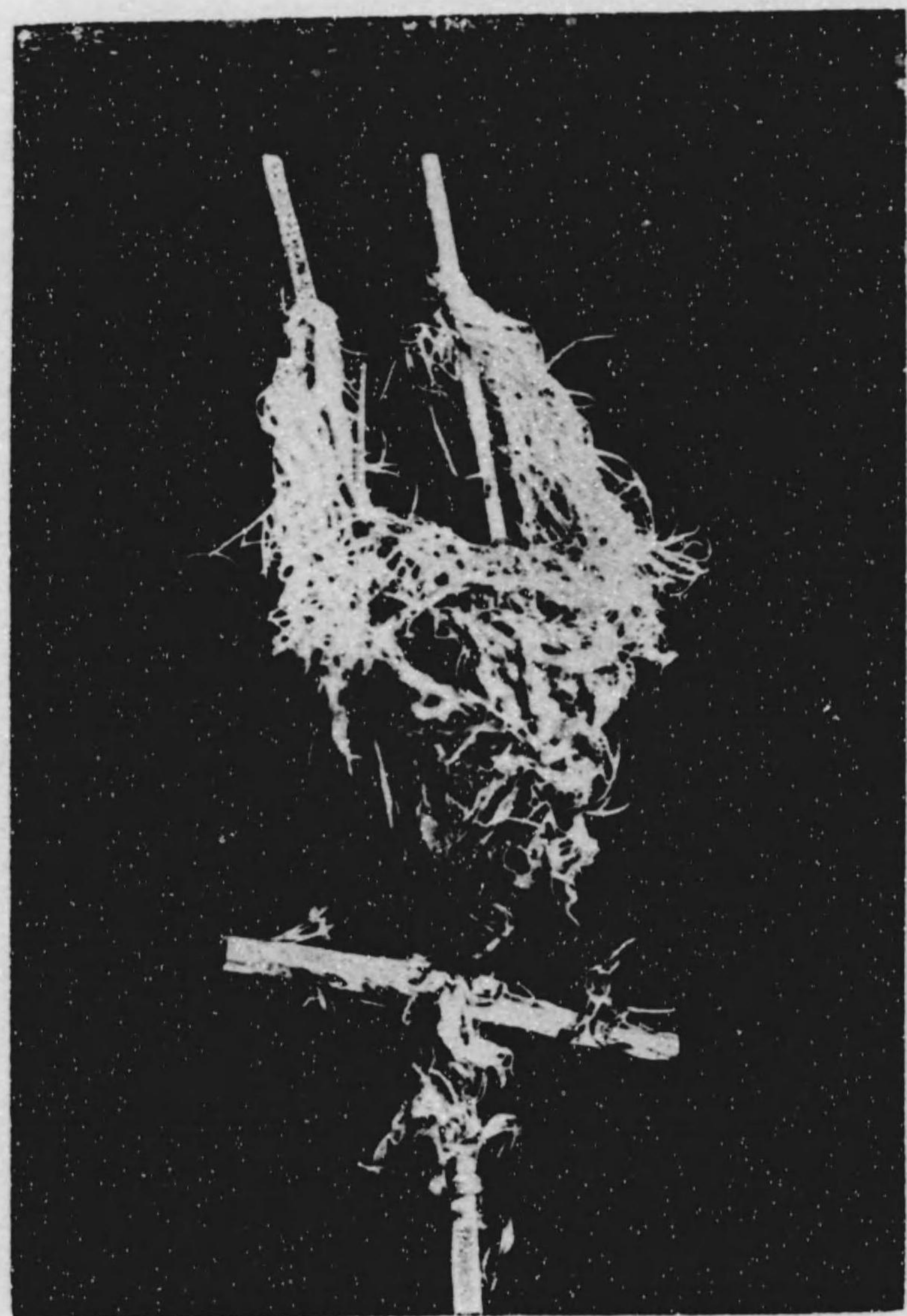
シマオウケリ飾にてウナイに別は骨頭刺を皮の熊へ稱さ(へらじこ頭)チンメバサ
糸。玉飾。刀で建く高くし少に火中のソササマせのに木又るへ稱さ(棒る遊)ニテ
るあて處るたり終を式る遊に國の神るな天てけ向に方西け掛を等



等シガイす招てしと客主な者著に前のンササヌげつをり終くなが悉も祭のり送熊
シテ者著 シガイウヨクタイ シガインクウネカリよ右。るあよつじ表を意敬は
シガイ井ウ シガイハ

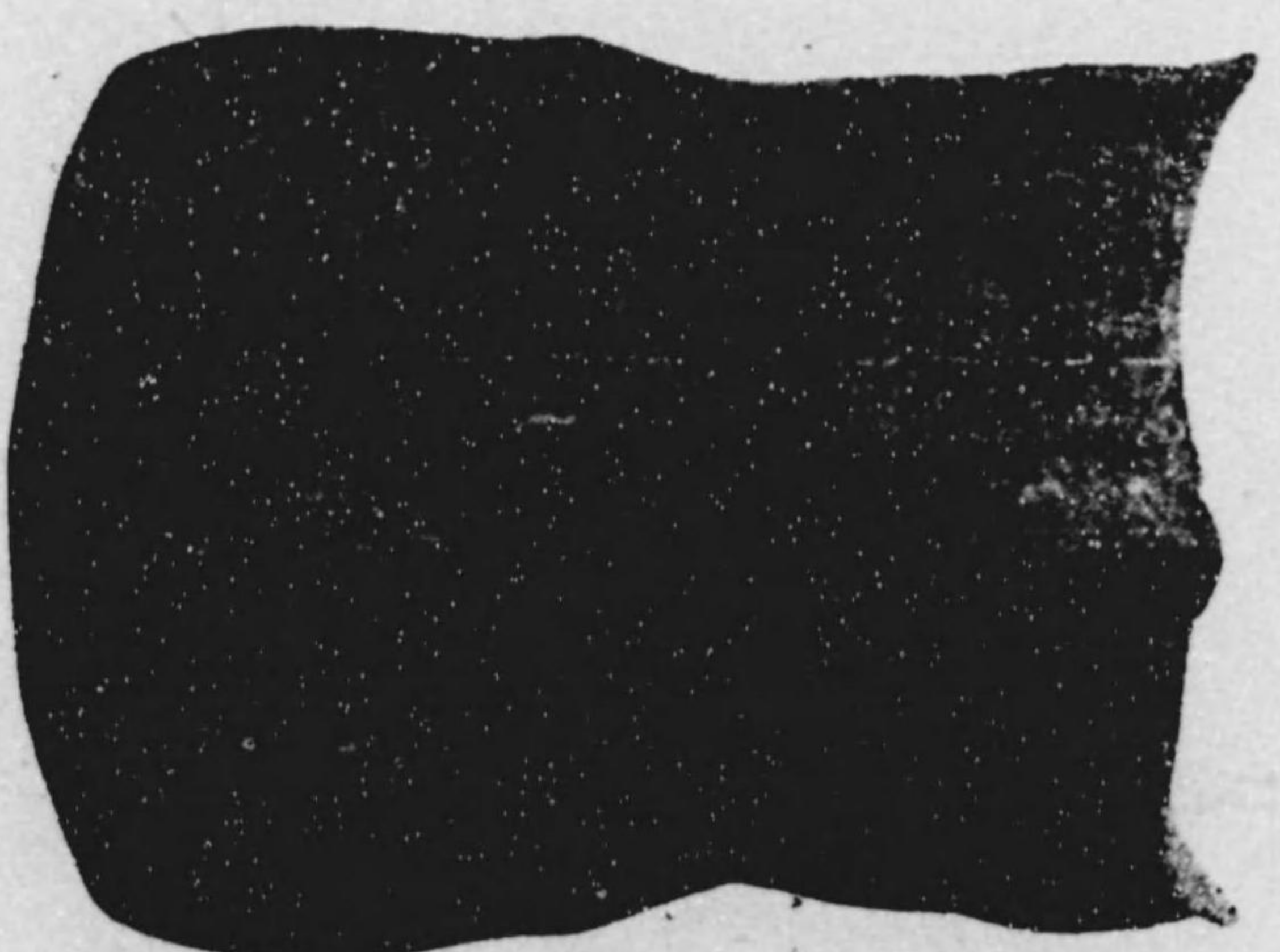


氏諸表代員々會究研土郷見北るたじ授後を會演實式儀代古人ヲイフ
事幹川塚小 長會倉島 長事幹村米 リよ右列前
事幹川赤 事幹邊進 氏幹尾 氏田福 リよ右列後



サバメシケ(頭骨の飾付)

上部の二本はアシリベコ、コアレ
イナウ、其の間は飾付けた頭骨
下方横棒はノツケオホコマツア
其の下方に下りあるはチメメ、カ
ツプである。



器土紋刻土出走網

(余寸九丈) んらな跡の繕修は穴の部分にてはのもの藏氏信幸中山は右
(りあ寸三尺一丈) 藏者著をのの一同にてはのもの藏氏要羅加は左



モヨリ貝塚出土

筒形織紋土器 (一尺四五寸) (下)

奈兵朝時代のものならん

薄手細紋土器 (上) 花瓶形 (一尺)

木下八郎工門氏藏

銅形袋耳土器 著者藏

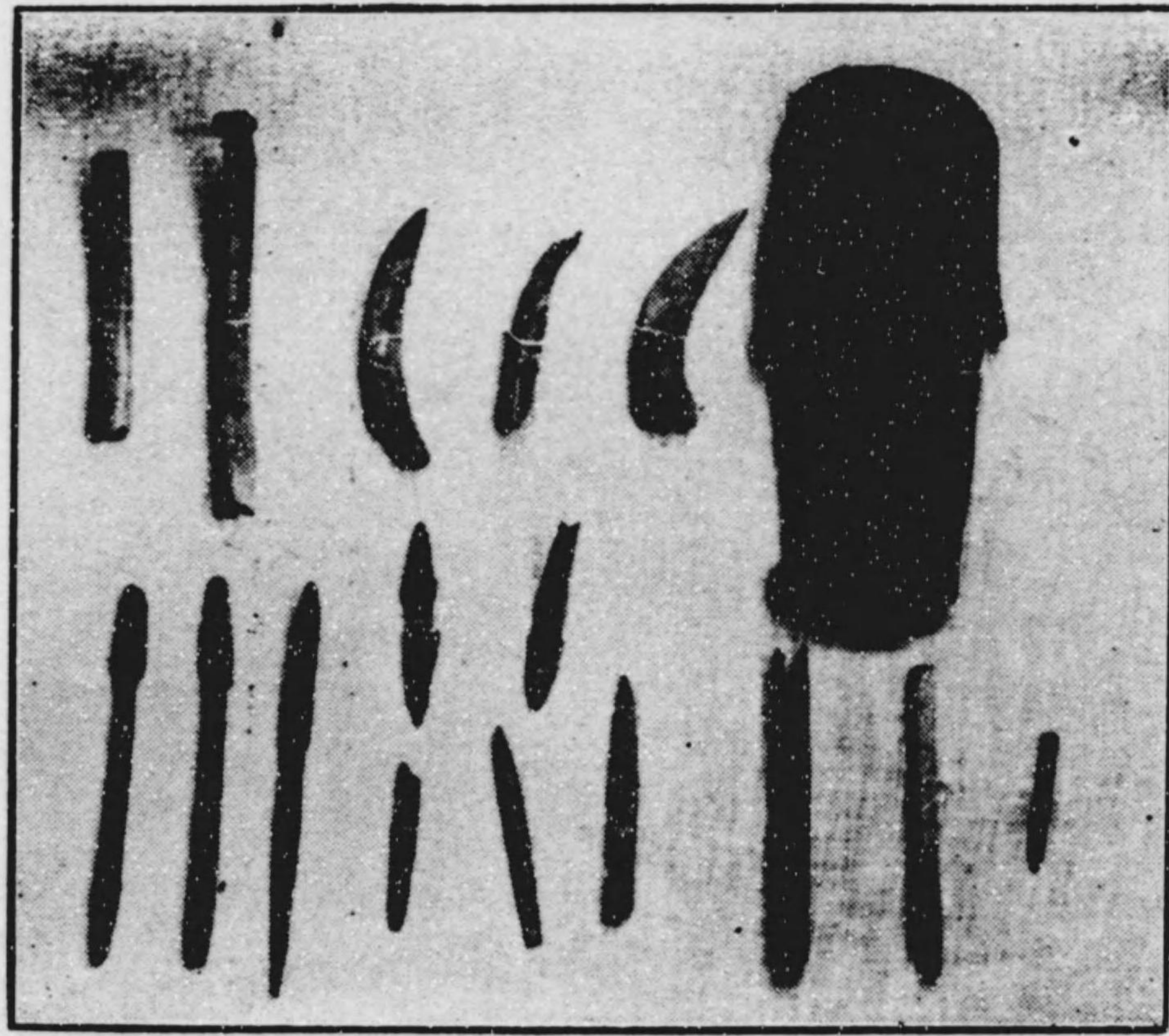
注口土器 古屋清軒氏藏

牙製熊の彫刻 (中) 著者藏

祭式の飾りとしたるもの

鯨骨製品

糸巻様なれども根付に用ひたるもの如し。(原形大)



上圖は網走川河口左岸モヨリ貝塚出土の骨角器にして、上列
 右より一は鯨骨造の長さ七寸巾三寸三分あり、二、三、四、
 は海獣の下頰骨にて造りたる、結の穂先なるべく、五、六は
 同じく肋骨にて造りたるもの、如し。
 中央二ヶは、同じく鯨骨にて造りたるもの、下列右より、一
 二は鳥の脛骨にて造りたる結様のものにして、三は同じく一
 骨にて造りたる鳥居博士の千鳥より得たる針入と申すものに
 類似す、綫細なる七段の刻文にて飾りあり。
 四、五、六、は鯨骨の鎗先。
 七、八、九は鹿角の矢の根様のものなり。
 是れ等の器物は宮城縣沼津貝塚出土品と類似せり。

目次

序	文	北見郷土研究會長	島倉民雄	著	者
第一編、アイヌ人と其の祭祀	言	一、熊祭と其の信念	一		
		二、祭器と準備			
		三、祭式と舞踊			
第二編、アイヌ人の史前時代		一、地	二五		
		二、遺跡	二七		
		イ、チヤシ	二八		
		ハ、墳墓			
		一、口、住居跡			
		二、散列地及包含層			
		三、遺物	二四		
		イ、石器			
		ハ、骨角器			
		一、口、土器			
附、管内石器時代遺跡遺物發見地名表	結	論	三九		

序 文

本會幹事長米村喜男衛君が今度本書を上梓せらるゝに當り序文を求められましたので、所感の一端を記して其の責を免れ度いと考へます。

米村君は考古學に、又土俗學に、造詣の深い点では専門家はさて置き其の右に出づる人は尠いであらうと思ひます。其の研究心の至烈にして、而も熱心なる事は夙に知らるゝ所で、殊に先住民族の研究についてはあらゆる機會を捕捉し利用して、研究に没頭して居らるゝのは誠に感服の外はないのであります。

申す迄もなく郷土研究は、先づ先住民族の生活住居の状態から其の一步が進まれるので、本書に詳説せられたアイヌ人の熊祭は、研究事業の一として本會主催の下に、客冬一般に公開したものであります。其の祭祀としての意義又は様式の点は勿論、其の他遺跡、遺物等の研究は全く郷土研究資料として、我北見に於ける將來の貴重なる文獻となるであらうと、思料せらるゝ次第であります。

郷土の階層を縦斷的に、又は横斷的に研究観察し其處に考古學乃至は土俗學的な意義を見出し、之を系統的に「學」として確立することは一部學者の専門的研究にのみ委すべきでなく、著者の如

き眞摯な地方研究者に依つて大いに助成せられ其の全きを期し得るものであつて、本書の如きは此等の意味に於ても獨り我北見郷土研究會の名譽の爲のみならず、考古學上、土俗學上誠に貴重なる學的資料なることを確信する次第であります。

昭和六年二月

北見郷土研究會長 島 倉 民 雄

序 言

此の書は我が郷土に残る不可解な遺蹟、遺物による考古學的研究に觸れ、進んでは現在のアイヌ族の土俗學的、民族學的研究の參考に資する考へから、語や文字に不な明る点の多々あるはもとより筆者の識るところであるが、感ずるまゝに記して御高見ある讀者の判斷を願ふこととする。茲に兼てより、我が郷土史の研究に力を捧げつゝある北見郷土研究會は、土俗學上の研究に資する爲め、美幌、藻琴兩コタン(部落)のアイヌ人約七十余名の快諾を得、昭和五年十二月七日彼等にとりては最も盛典であり、喜びである熊祭りを古式に則り莊嚴に、且つ盛大に行つたので當時の状態をも少しく考察して本書に記し、祭式を通じて彼等の思想、感情を理解して民族的融合に資せらるゝに於ては本懐これに過ぎざる處である。

特に熊祭り其の他に就いて御好誼を與へられました本會々長支廳長島倉民雄氏を始め、尾崎覺賢氏、合田綾一氏、片寄七郎氏、小梁川次郎氏、山田巖氏、最乗孝顯氏、赤川忠雄氏、福田悌三氏並に本書起草に際して助力された浮田一枝氏等に對して心から感謝の意を表す。

美幌町長加藤源太郎氏並に石橋政三氏はアイヌ人に就ての研究に便宜を與え下され、其の他アイヌ人代表菊地儀一氏はよく理解して教示の勞をとられた事等には深甚の謝意を表する次第である。

昭和六年二月十一日夜

我研究室に於て 著 者 識 す

第一編 アイヌ人と其祭祀(熊祭)



熊祭に就いて述べるにあたり、少しく動物に對する信念を述べてやみう

アイヌ人の熊祭を行ふのは、如何なる信念のもとに行ふかと云ふと、凡ての動物は死後其靈は決して變体せず、熊は熊、鹿は鹿、鷲は鷲、梟は梟となつて再び山野に現はれるものと信じてゐる。

そこで鳥や獸を獵殺すれば、イナウ(木弊)を捧げて町重に取扱ひ「お前の靈は町重に送つてやるから再び地上に來つて又吾々の食糧となつて呉れ」と祈りを唱へる。是等を取扱ふのは天なる神であるから、神には、イナウを捧げるのであるとされてゐる、熊送りの祭も此動物を獵殺した時と精神的には何等變化はない様であつて、只殺して食するのが目的で、神へ祈願の犠牲に供へる等の交渉は少しもないのである。只熊ばかりではなし、狐でも鹿でも山中で子供を捕へた時は神の與へたるもの、所謂授かりものとして大切に連れ歸り、養育して大きくなればいただくことになつて居る。わけても熊の子を捕へた時は最も大切に取扱ひ、エベレと稱へて婦女が乳を吞ませて膝の上で養ひ齒が生づれば始めて檻に入れ、人々と同じ食物を與へて養ふ事一年又は二年の冬に至れば此祭を行ふのである。

此の送りたる熊は北見國知床半島ラウス岳山にて昭和五年三月上旬捕獲したるものなるが其當時

九百丸ありて月の輪ある熊なるが送りたる十二月七日には十二貫目ありて月の輪を失したり。

熊送りの日が近づくと、男子はイナウ(木弊)イベアイ(鎗矢)ボンバケ(熊の衣)キサルンベ(熊の耳飾)タクサ(激らす棒)シオブニ(縄を結ぶ木)トセコツニ(絞殺棒)ヌササン(祭壇)や其他澤山のエゴロ(寶物なる太刀、箭筒、鎗其他)等に削掛の一片を付けて飾るべき準備に忙しい、又婦女等は祭器なる塗物や着物の手入れやら、カムイキナ(祭壇に供へる新菰)を造り、又は食物の準備等に取かゝり第一に酒を充分とゝのへる、是等の物に就いて少し述べてみよう。

(一) イナウ

柳の木を二三尺位に切り、皮を剥取り徑一寸位となす。小刀にて手際よく長さ一尺余、巾二分位に削り上げ上部三四寸下の處に止め、四方より纏めちり／＼縮めて垂れ下げ上部の残たる部にはカムイ、シロシ(熊神の符號)を掘刻みて送るべき熊の靈が此のシロシによつてイナウに移るのである。又其裏にイガシ、シロシと稱へる祖先からの家印が掘刻まれる、是等をイトツバと稱へる、此イナウにはイタクヨイガシの家印が刻まれてあり、是により彼等一門の者が此熊送りを行つたものであると云ふことになるのである。

(二) エベレアイ

エベレとは神の使なる神、アイは矢、此矢は特に祭のみに用ゆるものにして矢尻は太くなりて鎗矢

の如き形をなす。其太りたる處は黒く焼きそれに種々なる形のイヌエ(掘刻)をなす、其先端に一寸針形の堅い木を差込み、射たる矢は其細き部分のみ刺さる様になり、此際は毒矢などは絶対に使はれぬものなりと。尙此のアイ(矢)は雄熊なる時は六十本を射、雌熊なる時は六十三本を射る、されば女は天なる神の國の親へのお土産として三本余分に持つて行くのだと云ふ。

(三) ボンバケ

ボンバケは柳の木を削りたる其削掛にて繩をなひ、五寸目位の網形を造りて背に着せ飾るのである

(四) キサルンベ

キササルンベとは耳飾の意なるが、是は熊のみに用ひるものにてやはり柳の木の削掛の繩にて徑三位の渦を造り耳に齒にて穴をわけ飾として付けるのである。

(五) タクサ

タクサは徑二寸位、長さ約九尺の棒の先に笹を結へたるもの。

(六) シオブニ

シオブニは徑四五寸、長さ約五尺の丸木の上部に笹とイナウを結へ祭壇の前方中央地上に打ち込み笹を縛りたる繩を結へるものである。

(七) トセコツニ

トセコツニは徑四五寸、長さ約九尺の丸木を二本用意して置き絞殺に用ひるものである。

(八) 又 サ サン

ヌササンは徑一二寸、長さ七八寸の丸木を上方より約一尺の間隔を置き、斜に削り目を付け其上方に出来上りたるイナウを結びつけ、約二間程の場所に横木を結へそれに拾本立並べ所謂神籠の如きものである。

此の日は出来る丈け古風の晴着をつけて方々から男女老若入り交つて来た、男は縫取りあるアツツシ(木の皮にて作りたる衣女はシャランベ(内地木綿に縫取りをなしたるもの又は縫取なき縞織のアツツシ等を着す男女異なる模様の着物を着して来る、昔からの風習である。又當日參集したるアイヌ人の中には日高から來合せたる者も六七人の男女があつた。其の着物の模様は北見アイヌ人と其様式を異にしてゐるのは何人の目にも直ぐ分る。北見アイヌ人の男子用アツツシは袖口、袷元、裾等のみに黒又紺の縁を三四寸巾に廻らしそれに綱目様の一二條を模してゐるのみで、一般に目立たぬ様地味に出来、女も多くは内地木綿の黒地のものに茶褐色又は鼠色の綿糸にて綱目模様を織り男子よりは、肩と裾とに多く縫ひ取つて居る、是も甚だ地味に出来て居て男女共に曲線本位に大体出來てゐる。

日高方面の者は、男女共にアツツシもシランベも大柄で男子はやはり褐色のアツツシ織に白木綿を縫ひ付けそれに縫取りをなし又紺木綿の縁をつけなどして頗る華である。併此の形式は太古よりのものと思はれぬ、太古はやはり北見地方と同じであつたが徳川時代の末期頃から此の様に變化したのではないかと思はれる。それは古書によつて伺はれるのである。

アツツシの上に陣羽織を着た老人も七八人あつたが是はイガシ(長老)でなければ着られぬものと考へてゐる様に思はれる、是等は昔武人が用ひたのである。

集る人々はそれ／＼挨拶をかはしてゐる。それにはやはり一つの禮式がある中でも當日美幌コタンイクヨウイガシと網走モコトレタイケシイガシの挨拶の様式は顔を見合した彼等は互ひに口中で最も低く「オロオオ、、、」と咽喉を鳴らし乍ら五六尺へだたりて挨拶を組み兩人は差向ひたるまゝ各自の両手を軽く擦り合はせつゝ互ひに暫くの間何か語り續ける、それより少づゝ接近して左手を出して握り合へば右手にて互ひに相手の掌を撫でる。それより初めて雑談にうつる。女子等の挨拶は余りはつきりしたのを見ぬが初は右手にて口を蔽ひ一般に細い悲しげな聲を出して互ひに抱き合つて話等して居る。

招待者が悉く集れば司會者がアベシトイナウと稱へる、木片か鮑屑でも縛り付けたる如き、徑五寸許のものを爐中に挿して酒をイクバシユイ(髯の筑)にて手向けつゝかなり長い祈が唱へられる其の意味は「カモイチイイガシなるアベフチヨ」(神々の中でも最も大切な祖先の神なる火神)昔から神の

心に恵まれて来た事は決して忘れせぬ、今後も今までの様に又より以上に恵を興へて呉れ、そして今又こゝに熊送りの祭を行はんとする、恙なく終らして呉れ」と祈る。(第一圖)

それより爐を圍みて男子を前方、女子は其の後方に一同列座して酒宴を開き、又酒を呑めぬ者には果實や餅等を興へる。こゝに第一の宴が終れば一同屋外なる熊檻を取り巻き女子等は足踏みをなし手拍子を揃へて大圓形になりて踊る。熊には酒や果實や油飯(飯にシコロの實や漬なし等入れてアザラシの油にて煎り交ぜたるもの)を興へて慰める。

司會者たるイガンは熊檻に近づきて熊に酒を興へ「エベレよ明日はお前を神の國なる父母の許へ歸らしてやる、多くの贈物を受けて今宵は我等と共に踊り楽しんで呉れ」と祈を唱へてそれより酒を飲んで踊り、踊つては飲み(第二圖)熊には老人がついて絞殺する迄手厚く養ふ、其の酒宴中にはサクロベと稱へる一つの軍談を行つた老人もあつた。物語りを聞く女子等は其の廻りを取り巻き木片を手にしてトウキ(酒盃)其他の物を打ち鳴らす。「ハウハウ」等と聲を立て乍ら拍子を取り話は高潮して勇士が戦場で活躍する有様が手にとる様になり、威頂に達すれば立上りて其の表情を顯す状態は實に現始的な一つの舞踊となる如く見受くるを得た。

第二日目

メノコ達は、同じく熊檻を取り巻き乍ら踊り廻る。再度イガンが近づいて「エベレよ今お前にお願ひする事をよく聽いて呉れ、我等はお前を愛すればこそ苦心を忍んで育て、来たのだ、今やお前は立派に成長したから天なる父母の許に遣はさんとするのだ、我々は親切にお前を取り扱つた事を天なる父母に傳へて呉れ。そして再び地上に来て呉れ、より以上に親切にして盛大に送つてやるから、今日は快く願ひを聞いて靜に送られて呉れ」斯うした長々しい祈りが唱へられる。

祈が終れば男子達は熊檻に近づいて、上方から木皮で造つた繩を輪にして檻中の熊の鼻先に入れて首を其の中に入れ様とする、熊が直ぐは入らぬ時は幾人どなく人を替へる。そして其の首を入れた時に當つた人は幸運な人として嘶される。繩は首と前足一本を入れてくゞり締める様になつてゐる。熊は力一杯に暴れ廻り、檻から飛び出れば今一二本の繩をつけて萬一の危険に備へるのである。其の熊を圓形に取り巻き踊り乍ら送るべき場所たるヌササン(祭壇)の前方なるシオブニに縛りつけ、撰まれたる青年は勇敢にも熊の後方より飛びついて胸を抱きしめれば、他のアイヌ達は大勢にて取りおさへ、ボンバケを背に着せ、キサルンベを耳に飾りつけ一齊に取り放なせば猛り狂ひて暴れ廻る。そこに第一の矢は飼主より放たれる、次には第一の長老より射て子供に至るまで男子は射る。

熊が疲れて暴れなくなればタクサを突きつけては怒らしそして又矢を射る、全く弱り果てた頃に用意のトセコチニを持ち出す。一本は下に一本は上に頸を締めつけて人々其の上に折り重なりて叫び乍ら何事か唱へつゝ六七分間にて絶命する。(熊を結へた繩は、輪にして男女が取り付き廻り踊りたる後、男女が両方に別れ綱引きを初め中間より切斷する)。

絞殺した熊はやはりシオブニの處にて皮剥ぎをする。其時ノツケウボコマツブと稱へる經一寸五分約一尺の棒を中心に一寸刻目を入れ兩端より廻して二ヶ所宛刻目を付けたるものを咽喉部において、最初の刀は差し込まれるのである。

此のノツケウボコマツブは、熊の首と胴体とを取りはなす時に胴体の替り物として解剖の終る迄其の死体より離さず肉骨と別々に取りかたづけられる。其の時は内臓も血も少しも無駄にせず生の儘血は呑み、臟腑に至る迄全部分け與へて食べ盡す。頭部は一部に穴をあけて腦味噌を取り出して是も食す。四肢骨と肉の一部は煮て祭壇に供へる皮はカムイキナ(神前の薪蕪)にのせ其上に一時頭骨を飾りて其の前には六箇づ、串に通したシトギを二串と油飯や果實や菓子や乾魚や熊の煮肉等が供へられる。

司會者なるイガシが酒を捧げて禮拜しつゝ、「エベレよ我等が捧げる多くの品々を快く受けて神の國なる父母の許に行け、そして永い間アイヌ達は叮嚀に育て、呉れて澤山のお土産を持たして歸

してれた吳から喜んでくれと云へばお前の父母達はどれ程か喜ぶ事であらう」。

それよりサバメシケ(頭ごしらへ)と稱して頭骨は柳の削掛を繩にしたる數本のもの的一端を鼻孔に入れ一二寸の長方形の木片を差して締め込み、其の木片にはイトツバの如きイヌイ(刻文)を入れて居る、削掛の繩にて殆ど蔽ふが如くに包みてそれをバツカイニ(頭部の木)を稱へる又木にのせ兩耳の處には二本のイナウを飾る、此のイナウは雌熊なる時は右を長くす、雄熊なる時は左を長くするのであつてアシリベココアレイナウ(神の耳飾として捧るイナウと)稱へる、其の直ぐ下部には解剖の時に咽喉部に供へたノツケウオボコマツブを横に吊り下げ、又其の下部にはケヌムカツブ(最も大切な處)と稱へて隱部を切り取り吊り下げる。

此の頭ごしらへが終ればヌササンの中央に多く飾られたるイナウ等より少しく高く飾りつけ其の下方には所々にイナウの一部を付けたる脊椎骨其他の骨全部を結び付け、バツカイニの頭骨部にはイムシ(刀)チムツベ(首飾の玉)其他種々のイコロ(寶物)と串に通したシトギ等を吊り下げ後方に向け司會者なるイガシ其他二三のイガシ達は酒を捧げて又祈る、「可愛い、エベレよ、私が言ふ事をよく聞け、永い間お前を世話したが、今こゝにイナウ、イコロ、酒餅等を捧ぐるからイナウ及びバツカイニ乗つて父母の許に快く行け、そして天なる父母を喜してくれ、又天なる神の國に着いたなら神々を招き集めて捧ぐる此の品々を分け與へてくれ、そして再び此の世に來りて我

等に會ひ今一度供物をしてお前を送つてやらう、我等はお前を拜す、可愛いエブレよさらば靜に立つて行け」。

此の祈りが終れば參會者一同が聲を限りにホウ／＼叫びてヌササンの前に行きバツカイニにのせた頭骨の後方に近づくと、暫らくにして茲に全く熊送りの式が了る。

それより男は前に女は後に車坐となりイモカシケ(神様への御馳走の残物)と稱へて捧げ物を皆に分配して酒宴を開き男女共に熊の煮肉なども食べては呑む、余り變化なき踊は又初められて居る此の踊の中でも第 二 にタブカリと稱へる神を讃へる、舞と云はれイガシ(長老)達のみが刀を佩して舞ふ、劍舞の如きものであるが五六人も平列して婦女等の拍子に合して舞ふが、此の長老達が少し疲れたると思ふ頃には後方に 一人宛の若者がつき添ひ腰を抱へて舞ふ事暫くにして其の付き添ひの人の後方に又一人の若者が近づきて其の腰を抱へる、それは疲れを助くる爲めにして三人宛連れだちて舞ふ。これは少しく滑稽には見ゆるが彼等としては最も真面目の一場面なのである。此の舞踊は踊の中でも最も大切に神を讃へるべきものとされて居るが其の動作が四種の階段を廻りて替り行く。それをエホマ、ヘランネ、イツケホブム、ヘシユウニトロで終るのだと稱へられて居る。

次にはカムイネウサリカババと稱へる踊を婦女のみが輪を作りて踊り廻る。是は神を喜ばすもの

とされてゐる。

次にはリムセイといひて、男女入り亂れて踊る。是は神と共に喜ぶ爲めの踊である。

彼等の舞踊は何れも大差なき原始的なものであるが、其の様子を見るに多くの舞踊中一つの歌と云ふべきものをやらず、種々なる音調のみがそれ／＼變化するもの、如く、總ては踊の拍子をとるべき漸である。

是等の舞踊は、最も原始的で其の起原に近きものと思はれる。或學者の述ぶる通り、原始舞踊は人間の最初の本能の外部的に表現せられたものである。前述のサクロベなる物語は、彼等日常生活の縮圖と見なすべき物にして、歡喜、恐怖、悲哀等の感情が高潮に達する動作となりて表現さる、所謂自ら手の舞足の踏む處を知らずの境地に至らしめ、居ても立つても居られぬと云ふ悲想昂奮等は自らをして舞踊させるのである。

神々崇拜も又同じくカムイユウカラなる一つの神話によりて物語られる。神々の慈愛等に感激して讚美の表情を示す、又鳥獸の遊び戯れる動作を踊りの上に表して、鶴の舞等と稱して只ホウ／＼と踊り廻り神を喜ばすものなりと考へてゐる。是等の如きものは面白く味ふべきであると思はれる。斯うして舞踊は祭禮の儀式となり、婚姻に、戦勝の祈りとなり、靈や病魔を驅逐する爲めの儀式となり彼等にとりては實際生活上に極めて大切な關係を有して居る。

+ + + + +

踊つては呑み、呑んでは踊り、歡樂する事三日。時には七日と續けらる斯して彼等のみに恵まれた雪國唯一たる熊祭も終るのである。尙此の祭に参加せしアイヌ人名を參考迄に記して謝意を表すと共に彼等民族の祝福を祈つて筆を擱く。

美幌コタン

代表	菊	地	儀	一	下	方	助	市
イガシ	菊	地	イ	タ	都	榮	三	郎
	徹	邊	ハ	キ	田	中	福	造
	菊	地	六	郎	菊	地	梅	次
	住	田	西	藏	小	餅	谷	新
	菊	地	俣	之	菊	地	武	夫
	上	野	友	吉	宇	井	敬	吉
	田	中	由	松	菊	地		明
	徹	邊	長	吉	上	野	長	作

春	田	俊	夫	畑	野	ツ	ギ
菊	地	美	一	小	餅	谷	ハ
田	中	カ	ツ	徹	邊	エ	バ
徹	邊	ト	ワ	小	林	ツ	エ
下	方	ナ	ツ	都		ハ	ス
小	川	コ	リ	徹	邊	タ	キ
熊	谷	キ	シ	秋	邊	ケ	セ
田	中	ク	ラ	菊	地	ト	キ
本	間	ミ	サ	徹	邊	フ	ヨ
忍	路	マ	ツ	陸	別	コ	エ
小	餅	谷	メ	陸	別	サ	チ
菊	地	ユ	キ	網	走	濱	モ
都	チ	セ	子	宮	本	伊	三
菊	地	ク	ラ	代	表	伊	三
桶	谷	キ	ク	イ	ガ	森	伊
		ク	ク	八	森	伊	之
							助

白 取 養 太 郎
外 男 七 名

網走一里塚コタン

代 表 鍋 澤 一 心

イガシ 谷 川 カネウタノ

外 男 女 九 名

以上六十七名

第二編 アイヌ人の史前

一、郷土の遺跡、遺物

我が國の先住民族、即ち原始時代に日本の各地に住んでゐたと云ふアイヌ民族も、今はわづかに本道及樺太、千島の一部にのみ住むに至つた。

然て我が郷土には如何なる民族、如何なる人種の遺跡があるかは元より知るを得ぬが、至る處に限りなく遺跡や遺物か散在して過去文化のあとを示して居る。此れ等は大体に於て郷土に同棲する異民族アイヌ人のものなる事は疑の餘地なきものとされているが、此れ等に就いてアイヌ人に聞きただせば直に知るを得る如くであるが、遺憾ながら彼等は少しも知るよしもない、なぜなれば、アイヌ人には歴史を遺す文字がないばかりでなく、自分の祖先を自ら語らぬ風習もあるからである。

是等は別として、私は唯だ考古學の見地から郷土の遺跡や遺物に付いて私考を述べて斯道研究者の參考に供すると共に諸家の御教導を仰がんとする次第である。

アイヌ人の先史時代は、遺物に依れば石器使用時代より金石兩用時代に及んで居る事は申すまでもないが、石器使用時代と申しても其の年代は一樣でない。歐洲では一萬年或は七八千年を以て最新單位として居るが地方によりては、四千、三千、二千、一千と年代に相違のあることは認められ

てゐる。

石器使用は數千年、或は數萬年以前ばかりではないカムチャツカの北部、亞細亞ペーリング附近のエキスモー人、アメリカインデアン人の如きは今尙製作使用して居ると云ふ。又北見地方のアイヌ人も百五十年前頃迄は石器を使用せし事が傳へられて居る。

而して我國の石器時代には吾等祖先のもの、アイヌ人のもの等が大体に於て見とめられてゐる。其れ等石器時代の器物には、粗雑なる物と精巧美麗なる物とあり又同時代に製作使用せるもの、中には土器、骨角器等もある其の中でも土器は時代民衆の性能を表現せるものとして、當時の文化發達を區別する貴重なる史料とされてゐる。

此の土器にも大体厚手派土器、薄手派土器の二派に見なされ其の厚手派土器は焼火力も乏しく形態も不整で頗る粗大である、薄手派土器は稍々進歩し、焼度も高く、形態模様等も一種の美術品的なるものもある。

厚手派土器は海岸地方を遠ざかる山間地帯に多く、薄手派土器は多く海岸地帯に存在して居るの極めて興味あることゝされて居るが、我が北見地方では兩派共に出土される事あるを見受ることである。而して其等製作法には凡そ二様あり。

一、手作法（泥土を煉り固めて形体を手作る）

二、型塗法（繩編物フゴの如きものを壺として泥土を塗り付け共に焼く）
當地方の土器は多く手作法に依るものにして、型塗法に依るもの僅に厚手派土器に見らるゝのみである。

模様を描法、型体等種々の變化を見るのは薄手派土器にして手作法に依るもの最も多いのである。北見地方の遺跡にはチャシ（寒址）住居跡（堅穴）貝塚、古墳等であるが、石器、土器、骨器、等の土中に包含せられ、風雨により露出散在して居る處は各地に見受けられるところであるが、是等をも遺物散列地として、皆遺跡と見なすべきである。以下本論にふれて見よ。

一、地 形

我が郷土たる北見の國は、前方北部はオコック海に面し、後方南部は千島火山列よりなる北見山脈を負ひ、東方知床岬は千島列島に接近し西方宗谷岬は樺太島に接す人文未開の原始時代と雖ども交通の便は想像せらるものにして。又此の間沿海線二百五十餘哩は一大孤弦状をなす。北見山脈の山陵は根室、釧路、十勝、天鹽等の分水嶺となり、即ち本道東部特有なる濃霧を遮斷するの屏風となりて氣候風雨の調節をはかり、山陵よりは所謂コンセクイント谷によりて排水せられる河川が成年期の丘陵地をなす、中にも我が網走支應管内は各所に大小數箇の湖沼點在して魚具を充す、山陵

の森林地帯には鳥獸群をなす、沃野には菜果ありて實に天産物に恵まれれば太古より時代民衆の理想郷たりし事は疑の餘地はないのである。

一、遺跡

イ、チャシ

遺跡として最も顯著なるものはチャシである、此のチャシは人により保塞、城塞、塞址、土城、砦等とも書かれてゐるが、何れも同一と見なすべきもので其の様式たるや一様でなく網走町桂ヶ岡のチャシの如く、四十米からの断崖よりなる丘陵の隆起点を利用して空豪を穿ち、盛土をなし段を作り、御供形の小孤陵二つを設けたる如きは管内中他に見ざる處なるが、此の型態は釧路附近の大チャシの様式である。又遠軽村瞰望岩もチャシの一つに見なすべきもので、湧別川沿岸平地に突出したる七八十米も高き山陵より龍頭型に屹立したる上部には、十數箇の穴跡を見とめられ遠軽の地名もこれより生じたるものにして、此の眺望の場所をチャシとして利用したる當時のアイヌ人はインカルシ即ち臨眺する處の義にして同稱のチャシはサルマ湖口の常呂村字トープツ市街附近にあるチャシをインカルチャシと稱へらる。型式は少しく異にして居れども同地のアイヌ人川畑イシヨツヲエ(昭和二年七十三才)の云ふ處に依れば此處は見張の場所であると云ふ。

瞰望岩チャシの型式は他にも見る處で、斜里村ウトロ海岸に突出せるもの等も之れである又津別村市街附近津別川南岸断崖上を利用して作りたるチャシの型式は上部の平面に三ヶ月形の空豪を二ヶ並べて半圓を描きたる如く一箇は約三百坪あり、一箇は約百五十坪ありて内部には徑七八尺位の穴居跡數箇あり深の巾は廣部で約二間あり深さも現在約九尺あり當時を忍に充分である。

此のチャシに付いて美幌村アイヌコタン桶屋勲吾(イアラモンネス昭和三年八十六才)の語るところによれば當所はビラ(崖)チャシと稱へるもので、津別の名稱も此のチャシの下方に凹字形に河水が流入り込みある所より(ツ)入込(ベツ)川(の義)今茲に市街の名稱となりたるもの、如くである。此の式のチャシは、余り顯著ならざるも其跡を認むるに充分なるものは、常呂村市街常呂神社附近同村字トープツ市街附近及びライトコロ川沿岸等には三箇あり、網走町濱モコト神社附近、小清水村ヤンベツ原野トープツ湖に面したる處にも三箇あり(加藤要氏調)女滿別村女滿別驛附近網走湖に面したる處にあり、其の外訓子府村川岸、雄武村海岸、下湧別原野、知床半島ホロイワ、同チブドマリ、網走町ノトロ岬等にも存在すると云へども筆者は未だ參見するを得ぬが、此の形式のものは此處ばかりでなく、北海道の各地及び奥羽地方に迄及んでゐる様であるが、東部北海道には最も多く見受る事を得るのである。

此のチャシなるもの、用途や時代に就ては、未だ決定的な論説を見ぬ處なるが、此の型式のもの

は我が國ばかりではなく、烏居博士の調査に依れば、滿州及び東部西伯利亞より沿海洲、樺太等にも見受けられ、北海道のものと同じであると云はれる。又この用途に就いては北方民族の南遷を圖れる時のものと見なすべく、種々なる歴史上の關係から見ると大切な材料である様に思はれると説いて居る。

又これ等に就いて、ロシアの考古學者ブツセと云ふ人は、ニコリスクを中心とするチャシは勃海(西曆九二六年)若くは金時代(西曆一三九二年)のものであると云ふてゐる。

而して我が郷土のチャシに就いてアイヌ人(甲)に聞くところによれば、戦争をなしたる時に使用せりと云ひ、又(乙)の説には、こゝは祭式を行ふ場所であると云ふ。(丙)の説によればチャラシケ即ち談判所でありしと云ふ、又前述の美幌コタンイアラモンネシの云ふ處に依れば、こゝはブンキ即ち番人の居る處なりと、其の又番人は如何なるものなるかと聞くにこゝはよくコタン(部落)を望見するにき處なれば、ブンキを置きてコタンの安全をはかりたるものにて、もしも他部落民が何かの間違から戦いを爲さんとして襲撃をなしたる時、又は寶物を得んとして戦を挑む時等は夜間に行なはれるのである、そこで部落民達はこのチャシに家族的な番人を置き、敵來たる時ブンキはオトイバと稱へる聲を以て相圖となす、其の中にもハンゲオトイバ(近き聲)トイマオトイバ(遠き聲)等によりて敵の大小を區別す、聞き取りたる部落民はアンブイックカリ(聞き受たり)等を行ひ絶えず監視の任務を司らすのである。もし之れ等が事實としても余り古いものではないらしいのである。

このチャシに就いて記録によるところによれば、寛政元年五月(西曆一七九一年)現根室國目梨郡並に千島、國後のアイヌ人相計り二百餘人組をなして叛亂を起す、山に據りて壘を築き、濠を掘り鹿砦(木の枝を結びて障害物となしたるもの)を造りたるもの目梨のみにて五箇所に及びたり、とあるところを見れば近代のものもあるらしいが(遺物より見る時は、厚手縄文土器は最も多く出土なす、又石器骨器、鉄刃、又はインガルチャシ及び、ヤンベツチャシの如きは寛永通寶等の出土を見受けたり。

之れ等を相合して見るに可成の古代から寛政年間即ち今より約百五十年前頃迄では實用に用ひられたるも争ひなき平時には見張場となし、又祭場とも談判所となす等數十年數百年に亘る其の間アイヌ人の話の如く、幾多の變遷ありし事は考へ得るものである。

ロ、住居 趾

住居として見受くるは穴居趾である、之れは至る處に存在して居るが、當時の民衆は穴居生活と稱して土中に穴を掘り家根のみ上部に覆ひたるものなれば其の所は凹みて何人にも容易に認むるを得、其の凹みたる處を即ち穴居趾と稱し、其の形状も又一様でなく圓形、隋圓形、角形、長方形等ありて大小不同である。

穴居趾の多くは河岸、沼畔、海濱等に面したる小高き丘上にあるを例とす。又この穴居趾の時代に就いては之を網走町網走川、河口附近のものより觀察すれば、桂ヶ岡チャシ上のもものは稍々圓形をなしたる七八尺徑の小形のもの多く存在す、其の下方段丘上にも及びありてチャシ上の穴居趾よりは厚手縄紋土器の出土を多く見、下方段丘上のもよりは薄手縄紋土器を多く出土す。又左岸臺地はオコツク海の怒濤と烈風とが堆積した砂層により西より東に流る、網走川に沿ひ河口先端より三層の段丘よりなる、三角形を奥地より第一段丘と假稱す、其の上部にある穴居趾は徑約二間の角形のもものが規則的に並列をなし、此所よりは直線なる薄手刻文土器を出土し、第二段丘は右岸段丘と同じ穴居趾ありて其れよりは薄手縄文土器の出土を多く見、第三段丘上には隋圓形のものにて最も大型と見るべきは四間に七間もあるもの約三十箇も算するを得、出土品は薄手浮紋土器を見受ける。

此の穴居趾は、土器の出土状態より見なす時は型式により其の時代を異にすると考へ得るのである。

ハ、 墳 墓

墳墓と見なすべきものには未だ判然たるものを見ざる處なれども、穴居趾附近より人骨を見受る事最も多く、又少しく離れたる網走川河口先端の突出したる地点に土器、石器等を副葬となし埋葬

したるが如きを見受くる事あり。此の形式のものは常呂村川口附近、並に市街地後方の砂濱網走川河口左岸モヨリ貝塚、並にバイラギ海岸、斜里村ウナベツ川河口附近等は穴居趾を離れありて此の形式を取りたる時代は最も近代のものに見受けべく、又穴居趾と並ぶ貝層中より一尺内外の表土下にて不規律に人骨の横たへあるを時々見受くることにして、死者と住所と並べて埋葬する等は如何なる信念のもとによるか、少しく解釋に苦しむ所であるがこれを未開人の土俗に比較する時は敢て六ヶ敷いと思ふものでないのである。

今その例を臺灣生蠻人によりて見れば各種の蠻族が其の埋葬法を各々異にして居る、その内でも北部山上にあるタイヤル族は死者をその家の内の自分の寝て居る床下に埋める、此れは死者と家人との間に親しみと懐しみがあつた爲であるからと云ひ、又東海岸地方に住むアミ族は死者をその家の軒下に葬むる事になつてゐる。

穴居趾附近より人骨の出土する例は南北共に未開時代の信念にあまり隔たりなきものと思われるのである。その他遺跡として土層中に段階を作りて、上層よりは貝層と共に薄手派土器の包含層を見、下層よりは異なる土器石器の包含層を見うくる事あり。又モヨリ貝塚の如きは四層五層と變化しあるを見受くる事ありて、是等は遺物包含層と見なす、其他遺物散列地等も各地にあれど別記する迄に及ばずとなす。

三、遺物

イ、石器

此の地方より出土せる石器の種類は、其の用途によりて區別せば利器、加工具、裝飾品の外未だ用途判然せざる物を見受けらる。製作法より見れば自然石をそのまま、用ひし槌の如きものや、打抜き又は敲いて作りしものあり、又砥石によりて研磨して作りたるものも有り、又は原形の一部のみを磨きし半磨製品等あり。

打缺製品には石鏃、石槍、石匙、皮剝、石庖丁等銳器に多く其の石質は黒曜石十勝石にして稀に瑪瑙にて作りし物を見る、此等は多く打缺いて作りし物にして、水成岩、砂岩等にて作りし石棒、環石、石斧等は敲いて作りし物ならん。

磨製品には石斧、石鑿等にして、その用石は綠色泥板岩、蛇紋岩等最も多く裝飾用の玉類には綠色白色の玻璃質を用ひたる様である。石槍は二三寸より、七八寸位までにて大形の物は桂ヶ岡及びモセウシナイ附近の高臺に多し。

石鏃も同じく桂ヶ岡のものは大形にして三角形の有柄石鏃で長さ二寸八分、幅一寸九分ある物あり、而して之は石鏃にあらずして或ひは漁具のヤスならんかと思はる。

石鏃も無數に得られるけれども木の葉形、有柄等昔武骨にして粗雑なるが、河岸平地に出るものは缺く方法も密にして實に精巧銳利なるもの多し。網走川左岸先端より出土せるものは最も小形にして、カリマタ形、ハート形、鋸齒状等も見受けられ最も小形なる有柄鏃は長さ三分程である。

石斧に於ては川岸、平地に出る物大形にして小形のもの見受けられず。高臺方面より出土せるものは最も大形にして又變化ありて巾三分長さ一寸四分のもの、五分に八分位の圓角形の物等あり。

石器の最も多くの種類を出せる處は網走町南六條東五丁目附近にして七八寸の石小刀、石皮剝、石庖丁、石匙、有穴石斧、其他石槍、石鏃等發見せられ、石斧以外は皆黒曜石にて作られ(筆者藏)其の製法は頗る精巧優美にして銳利である。

有穴石斧(渡邊前中學校長藏)は蛇紋岩と思はしき石質にて作られ、巾一寸五分長さ二寸三分にして稍細き頭部の薄き端にロクロ式(弓弦に石錐を結び付けて回轉さす)穴あり。此の有穴石斧には實用品、木工用、土器製作用と、飾裝用との各種ある如くなるが、本器は刃類に使用せる痕跡を認められ、且つ一部に蛋白質か脂肪類の酸化せる如きもの附着してゐる。此の如き附着物のある石器は多く貝塚中より發見せられ多くは不用品を捨てたる物なるも、時には使用の時貝殻等に混じ入りて捨てられたる物あり、中に附着物のある刃部が磨滅したる如きものあるより見るときは加工用のみならず什器として肉を敲き、貝を割るに用ひしものならん。

石斧の形態は短冊形、舌形等多く、薄肉の鑿形にして大なるものは長さ七八寸巾二寸五分程のものもある。

四、土器

土器に就いては網走町の物より述べることにする。

當町より出土せる土器はその様式により大体四種に分かつ事を得、左に假稱を與へて述べこの様式を他方にも引用せん。

A式 厚手縄紋土器

B式 薄手縄紋土器

C式 刻紋土器

D式 浮紋土器

にして、外に様式の異ると思はしき物二三あれども之れ等は後に記す。

一、厚手縄紋土器 (A式)

製作法は型塗法による如く縄目正しく列ひ土器に深く印せらるゝ、又腰部より上に一二の凸形帯縄紋あり、口縁部は波状を呈し不平行なり。

この土器は肉厚にして赤褐色を呈し、泥土に多量の砂礫を混じ焼度も不足にして現今發見せらる

るもの皆原形を保たず。形状はフゴ形最も多く、徑五六寸高さ一尺位にして煙筒形等あり、形状大なれども變化少し。

二、薄手縄紋土器 (B式)

手作法に依る如く土には多くの砂礫を混ぜるも、前式土器よりは精巧にして焼法も稍進歩し紋様に於ては前式と異なり、縄目生地に放射状を描けり。形は前式と異なり、頗る整然たるものにて大形小形共實に優美にして、一種の美術品たる如きものあり。各式中最も多くの變化を認められ挿圖の如く花瓶形の物丈一尺余有り、又は環耳付上下圓角鍋形にして上廣く徑四寸高さ二寸五分のもの、並に型態不完全なれども樺太、千島よりは鍋形土器にして内耳式の物をよく見受ける處なれども網走町附近よりは袋耳あるものをも見受くる。壺型にして注口あり片口式のもの、又灰干形(筆者藏)の物等あり。

三、刻紋土器 (C式)

手作法に層し、泥土に少量の白砂を混じて作りたる如く、最も薄手にして焼方並に火力乏しく危弱にして透水力甚しきを以つて内部には塗料を用ひたる様である、塗料は白樺を焼きて油煙を作り其れを内部に塗りて篋様の物にて光澤の出るまで全面に擦り付けたるものならん。又赤色の塗料と思はしき物は赤粘土の乾きたるものを粉末となし前様の方法に依る物ならん。

此の式は練土法及び焼成法は前式より退化の感あれども紋様の表現法及び形態は非常に進歩し格子型、矢羽形、鋸齒状、結束線の帯状模様、唐草模様角形にて渦巻を現はせるもの等隠刻線にて書かれて居る模様の描法はその痕跡の判然たる所より知るに、最も小形の石斧、石鑿、(巾三四分長さ一寸六分)等を用ひたる如し。形体には鉢形最も多く、高盃形、皮袋形、鍋形之に次ぐ。皮袋形には竈焼時腹部に大なる龜裂を生じ上下に數個の穴を造りて細網にて結びて用ひたる如き物あり、之により推せば時代人がバスケット的にも用いたる如し。

四、浮文土器

(D式)

之は手作法に依る。泥土中に多くの砂鐵を混じ煉りて作り、肩、口部に細き曲線又は浮模様を出し生地はなめらかにして無紋なるは本式の特徴なり、

形状はよく整へられ焼度最も高く、此土器の作られし時代、模様には前記土器に比すれば退化の感を與へられる、この時代には土器の藝術的好美心はうすらぎ、他に木工、織物、刺繍など盛んになり是等に心は集りたるもの如し。又この土器は鐵器と共に多く發見せらるゝ所よりみるに最も現代に近く製造使用せられしものならん。形状に於ても變化少く、唯だ甕形、壺形のみにして發見せられしものは多く完全なり。

五、別種土器

前記四式の他に、厚手無紋土器を見受らるれども、この土器は一種特有の様式によるものにして出土場所も網走橋北側下方の小部分に限られれば、之のみは別に記す事とする。

同所より鐵道工事の際土取りをなしたる時、地下一丈の處より出土し其の形態には壺形、椀形、燈心皿形、土劍、土棒、圓盤形、玉形、獸牙形等ありて中には紐通し穴あるものもあり、此の土器は最も多く變形に富めども其の焼度も不完全にして、土棒の如きは其心に萩を入れ粘土を握付けてやきたる如くなるが心の萩は未だ焼却されずにあるもの等も見受けらるる處よりすれば、之れ等は皆副葬品なるべく而して他方面より發見する副葬品の多くは實用品を副へあるにこれのみは特に副葬品として作りたる如し。

この土器の形状より見る時は大陸の文化を取り入れたるものに非ざるかと思はれる、それは土劍に於てもトルコ式の古劍形をなし、又土棒に於ては上部一端を少しく細くし曲りたる如きは現今のヌツキ状をなす。又は上部に玉の付きたる如き棒形其他棍棒形等あれども是等は皆木造棍棒を武器として用ひられたる時代の模造品なるべく、是等の風習は英領南アメリカ、スワツ民族が今尙戰闘ダンスと稱して片手に楯を持ち片手に木製棍棒を持つて戰闘の様を現はして居る。斯の如く原始時代に大切なりし武器の形態が本土器使用民族に後世迄かたち造られて居るのはアイヌ族にも大陸より來りし文化の齎らせしものならんか。

六、土器時代別

三〇

又土器の出土状態に付き地形上より見る時は、

A式土器は桂ヶ岡チャシ、及び其の附近丘陵並にその下方より出土す。

B式土器は丘陵下方に續く川岸平地より約一丈ばかりの段丘よりなる臺地と、其の斜面より最も多く出土す、この臺地は網走市街地南五條六條の東五丁目より隆起して、南一丁目通りより川岸に向て構成す。南四條東二丁目邊迄で其の出土を見其れより先は稍平坦なる底地となり河岸の土砂と平行をなすに至るも、此處よりは何等遺物の出土を見ず、

C式土器は其の東五條六條の丘陵東端部の海岸に近き所より少しく出土を見るのみにて、南部市街地よりはC D兩式は稀である。

七、土器の時代

北部市街地に於ては向陽ヶ丘下方より河岸に添て少しくA式土器を見、新橋より新道を中心として、道路上方には三箇の連鎖状穴居趾あり、其れより北部市街地をなせる臺地舊網走橋通りに至る處迄はB式土器を多數に出土するを見る、其の部の海岸に近き所よりはC式土器を見、舊橋下方保安林の境界より先端に向てはB式以外に認められず。

地形の状態より土器の式別に出土するを見るは、即ちオコック海の荒浪が海濱に打ち寄せる時網走

川の河口を塞ぎ、現在の市街地未だ低かりし時、クルマトマナイより一面に湖水状をなしたる事もありたるならんも其の時代は僅に丘陵上を住居となせしA式土器使用時代なりしもB式土器出土の臺地は其の後に構成され、此のB式土器使用時代の侵入せし頃にはA式土器使用時代が奥地か山間地方にのみ使用さるゝに至りたるならん。

而して若し之を同一民族と見なす時は丘陵上のA式土器の流行時代よりB式土器の流行期となる、それよりD式土器の流行期となり、此のD式土器使用時代は鐵器と併用されし如くにて出土箇所よりは古代の笹種鐵槍、並に鐵刀等も見出され此の出土箇所たる先端は打寄せる怒濤と烈風とが堆積した砂の臺地なれば最も新しく現代に近きものと見なすを得、附近は地下五尺の深さよりは臺地と見られ、D式土器並に前記の槍又は石槍、大形石斧等を南側にそへ頭部を西にしたる仰臥屈葬による人骨をも見らるゝ此の方法は近代アイヌの埋葬法とあまり變化なく、或は耳輪等も出土す。其の耳輪は眞鍮に小さき空色の玉(カラフト玉)を付けあり。

D式土器の模様形態等變化の多くある事は前記の如くなるが、又各式共に北見沿岸至る處より見出される事は事實にして、B式土器も私の見たるものは下湧別より、斜里村知床沿岸區より最も多く見、本器使用時代は最も長く續きたる如く、鐵器の同所より出でざる處より推察すれば石器時代なる事は疑ひはなし。

A式土器は實際に山手方面より出土する事は、知友遠輕村遠間榮治氏の出土表を見ても實證せらるゝ處である。四式の内に最も不明にして又興味あるはC式土器である、本器は大和民族の使用せられしと云ふ彌生式土器にも又外國(南米其の他)の出土とも類似せる傾向あり、ABD三式とは其の構製描寫等は全然異にし或はC式土器使用の時代がBC式の中間に一時侵入したる事あるものにあらざるや、此の土器は當所のみならず、常呂沿岸よりは小笠原元常呂校々長發見す、下湧別村沿岸よりは遠間榮治氏加藤要氏等に依りて發見せられたるところより推察するに本器使用時代も可成長時代と思はれるものなるも、其の量の僅少なる所より見る時はB式の十分の三四に過ぎざるべし。

ハ、骨角器

骨角器の多くは海岸地帯より多く出土を見、鉛類に屬するものは最も多く針、針入、糸巻、土掘用と見受くる大形筥等を最も多く見受る、又鐔形其の他熊の牙齒にて造りたる熊の頭的美丽なる彫刻品等も見受る事あるも實に見事なる藝術品なるに驚く可きものあり。

是れ等の器物の内鉛類は漁具として用いたるものなるべくも筥形は穴居を作り又は農具的に用いたる如く、鐔形等は飾身具ならん。是れ等は皆鯨骨にて造りたるもの多く中に鉛形には獸類の下角骨にて作りたるもあり針、針入等は鳥獸の脛骨にて作りたるもの多く、牙製の熊頭は祭祀にバシユイ(髯上形)につけたるもの、如し。

三、結 論

石器、土器、骨角器等は日用の什器たりし事は申迄もないが、中には實用品と思はれぬ模造品の如き物も多分に見受くるのである、石器の稿にて述べし如く小形有穴石斧、又は有穴玉類、或ひは鐔形石製品、又土製品には刀劍形、ステッキ形、小鏡形、バット様棍棒、等其の他實用品と思われざる壺形、碗形、皿形、高盃形、高平形等にして焼度も實に危弱にて土棒の如きは眞に入れたる萩が焼けず其の儘ある事を見るあり、壺形土器にして龜裂を生じたるものには石鏃にて穴を開け繩にて縛りたる如きものありて實用品とは思われず。壺形、鉢形、鍋形等は日用品なれども其の内でも優秀なるものは祭祀用として別に扱ひたるもの、如である。

又石器の中にも石斧は家庭用利器となし石鏃や石槍等は武器又は狩具となせし如くなれど余りに大形にして判別なし難もの等の見受るあり、其等は紋別郡遠輕村宇奥白瀧より出土する大形石器類は木の葉様の石鏃型にして長さ七八寸、巾三四寸、目方は三百匁もあり、同所よりは其の外匙形の石器にして百五十匁もあるもの及び、分銅形にて直径四寸高さ三寸五分余のもの小形なるものは七八分の物あり其の他遠輕村宇社名淵、富岡氏經營の家庭學校内博物館には長さ約一尺三寸巾三寸余もある實に見事なる劍形石製品陳列しあり同校内農園内より出土したるもの、由尙又同村内遠輕

市街に遠間榮治氏其の他の創立にかゝる遠輕郷土博物館には驚くべき同村出土の特種と見とむべき大形石器は種々陳列せられてゐる。

是れ等の物は大体に於て祭祀に用ひたる事は現在のアイヌ人土俗に依り伺ひ得るものにして現今のアイヌ人の古風の家にはイナウにて飾たる寶物の置場を設け多くの漆器類や武器類を陳列なしあり祭祀の時は之をヌササン(祭壇)に飾る物にして其の中にはイゴロタムと稱へる寶刀、中には木製の物に銀にて所々に飾を付けたる刀の模造品や武人の飾身具の一部分、又は矢筒にイナウの一片を付け等して飾るを好む風習あり。

古代人も漆器類の入手前には石製品や土製品に種々なる手工を考へ後世に至る程其の變化と進歩を表らしたるもの、如く、土劍の如きは、喜田貞吉博士の近説に依れば、網走町ウバラナイより蕨手型直刀の出土を見受るところなるが其所よりは土製の刀劍が模造されて居るを見ると云われ此の説に眞を置くとせば地方の時代人は其の刀の珍らしき一つの寶物として其れを模して土製品を作りて祭祀となしたる如く之に類する物は網走附近よりは數本の出土を見受るに及べり。

又遠輕村白瀧より出土する大形石器は實用品とは見受け難き物にして之れ等はやはり寶物となす時には南洋諸島民族の古代に使用したる石貨の如く物々交換の代に用ひたる物にあらざるか當所は石狩岳の北見に流る、山陵の一部にして同石器の原石たる黒曜石のみにて形造られたる小陵二ヶ所

あり、最も原石に恵まれたる處なれば如何なる大形のものにもたやすく得られべく、當所には至る處に製造の跡あり、時代人の一大生産所の如き感あり。土器にして最も新しいと見なす壺形、鉢形等の實用したるが如き物の中に人骨と供出するを見受る處なるが其れ等は、底部に穴あるをたま／＼見受る處にして一見不可解の感あれど是れは現代の土俗より見る時は既に窺ひ得べく、それはアイヌ人は動物ばかりでなく手工品や風雨に至る迄總てに靈があると信じて居るものであるが故に、死者の靈が死後天なる神の國に行き多くの品々を持たしてやれば其死者の魂は不自由なく幸福に送られるからであると信じて居る。而して魂ある物体を其のまゝ副葬しては其の用をなさぬ、やはり物体を死者への供物とするには魂を除いて副葬すれば物体の靈も死者と共に神の國に行くのであるとして副葬する處の、アツツシ等は其の一部を破り、漆器類や鍋等も一部を欠く事によりて満足なして居る。是れ等の信念と末期土器使用時代とに余り隔りなきもの、如く看做すのである。

斯の如く石器時代の末期と看做すべき時に至りて多くの器物に變化を見るに及びたるも是等はいつの頃からであるか少しく愚見を述べてみよう。

北方民族たるアノヌ人が南進して本洲及び九州迄でも足跡を印するに至りそこには相當アイヌ式文明を建設して居たが原始時代の和民族が南方より侵入して數千年間に渡り兩者古代文明の對立となりたるも、和民族は漸次支那文明を取入れたる爲め著しき發達を見、遂にアイヌ民族

をして北退せしむるに至り齊明天皇の時代に阿部の罷羅夫が奥羽地方のアイヌ人蝦夷を征服してアキタ、ヌシロのアイヌ人を従へコシノ島(今の北海道)迄征服に向つた事は書籍にも見ゆる處であつて、其の間限りなき種々の葛藤あり交行ありて大和民族の時代文明はアイヌ人を刺戟して時代々にそれぞれ生活様式をも支配なしたる事は窺ひ得るのである。

吾等大和民族は太古より土器使用民族であつたが土器の形式も中古に至り佛教が渡來するに及び固有の生活様式に一大變化を及ぼす所謂神佛習合の思想と共に佛具が祭器にとり入れられるに至つた事は云ふ迄もなく從來の土器類が木製漆器となり是れ等は神佛の祭式のみでなく實際生活の様式に反映する土器にも祝部式創造に至りたる如く、此の祝部土器の形体には著しき變化が見られ其用途の判別に苦しむものもあるも是等は佛具の様式を取り入れたるものゝ如くである。

而して郷土の土器にも薄手細紋土器には實用器物と見なすべきもの多けれど、刻紋土器にありては壺形、鉢形等の外高盃、高平等種々なる器物に變化を見るに至り此の土器使用の時代にはアイヌ人も祝部土器や漆器類の大和民族使用器物を模して一定の祭器となすに至りたる如くである。

然るに吾等祖先が後世に至りて北海道開拓にあたり、先住民たるアイヌ人を愛撫するには彼等の最も愛好する古代に於て儀式や祭祀に用いたる漆器類の不用品を寶物として與へ使用したるより土器類は廢物となりまたたく間に其の影を失するに至りたるものならん。

かくして我が郷土の遺跡、遺物は數千年前より一二百年前迄に及び、長年月間の變遷を物語つて居る。

× × × × × × ×

而して、アイヌ人は全體何處から來たかど云ふ事から少しく考へねばならぬこと、思ふ、此の問題は最も重大なことであつて、多くの學者の競ふて研究しつゝある處なるも未だ一致の學説を見ないのであるが、近事白人の分派であると云ふ説は最も多いようであつて、英國の或る學者はアイヌ人は石器時代の白人の殘存者であるなどと申して居る。

若しもそれとしても何處から渡來したかど云ふ問題になるとロシアのユレンク氏の説によれば、アイヌ人の古郷はアムール地方ボセット灣に中心を置かれ、朝鮮半島を経て日本に入つたと言ふが、島居博士の説ではこゝ十年間の調査によれば朝鮮、滿洲、蒙古等にアイヌ人の遺物は發見されぬと言っている。又金田一教授は言語學上から見た説では、アイヌ人は多綜語であつて今此の言葉を用いて居る處はアメリカ土蠻からエスキモー、アリウトそれからベーリング海峡を渡つてシベリヤの東北隅からカムチャツカに住むチュクチ、コリヤーク、ユカギール及びカムチャダー等所謂極北種族の言語がそれである。

即ち、アイヌ人の通つて來た途はこれ等の人間の住む北部地方でなければならぬのであると云

われて居る。参考迄に附加へて筆を細く。

附

網走支廳管内石器時代遺物發見地名表

本表は元網走支廳在動たりし加藤要氏の調査に依る處大なるものにて遠間榮治氏並に筆者等の發
表せしものをも再録する事とする而し本表を持つて充分なりとは申難く今後も同好者の新發見に依
り補訂し且つ又土器に於てもそれ／＼分類して完全なる表の作製を爲さんとするものなるも今此處
に本表を記して參考に供さんとす

地名	遺跡地	出土品	備考
網走町 網走川 口左岸 字モヨ	貝塚	石器、磨石斧、石槍、 石鏃、石匙、石鏃、 魚、鳥、獸骨、 石器、磨石斧、石槍、 石鏃、石匙、石鏃、 人骨	
同	包含層	石器、磨石斧、石槍、 石鏃、磨石斧、石槍、 石匙	朝鮮式 土器
同	同	石器、磨石斧、石槍、 石鏃、磨石斧、石槍、 石匙	堅穴 附近
網走町 網走川 左岸新 橋附近	同	石器、磨石斧、石槍、 石鏃、磨石斧、石槍、 石匙	堅穴 附近
網走町 網走川 向陽ケ 岡	散列地	石器、磨石斧、石槍、 石鏃、石匙、砥石	
同	包含層	石器、磨石斧、石槍、 石鏃、磨石斧、石槍、 石匙	
同	散列地	石器、磨石斧、石槍、 石鏃、磨石斧、石槍、 石匙、 人骨	
網走町 網走川 一丁目 東	包含層	石器、磨石斧、石槍、 石鏃、磨石斧、石槍、 石匙	
同	同	石器、磨石斧、石槍、 石鏃、磨石斧、石槍、 石匙	
網走町 網走川 六丁目 南	同	石器、磨石斧、石槍、 石鏃、磨石斧、石槍、 石匙	チャシ 堅穴

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
放牧地	上セト	橋附	澤コト	澤右岸	左岸	野上カ	岸別川	野上カ	近電所
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
附近	小學校	奥白瀧	臺街裏高	白瀧市	附近	武利瀧	武利川	左岸	武利川
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
淵上社	口附	粉澤入	白瀧	臺附近	股學高	白瀧二	瀧ノ下	瀧ノ下	天神山
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
岡	學田	農場	淵阿部	中社	校附近	淵小學	上社	校農場	淵泉庭
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

置戸村戰 川散列地 石槍、石鏃、石匙

				同	同	同	同	雄武村澤
				端右幌下 岸内幌内 突川内	内神下 社社幌内 境境境内	境ネオ 牧ツト 場プイ	コウ エン ン	木散列地
				散列地	同	同	包含層	土器、石匙、石鏃
				土器、石槍、石匙	土器、石匙	土器、石匙、石鏃	土器、石槍	
				同	同	堅		
						穴		

昭和六年五月一日
小牧實繁

